

# 介護の世界で働くようになった私

小林 瑠以

「背中を押す」という表現があります。人が新しい世界に足を踏み入れようとする時には大きな勇気がいるのですが、誰かが、躊躇している自分の背中を押してくれ、飛び出せることがあります。私のそんな体験をお話したいと思います。

私は、この春から、訪問介護やデイサービスで

介護の仕事をするようになりました。三年前に、母（現在は特別養護老人ホームにいる）の痴呆が重くなり一緒に住む弟たちだけでは介護をやり切れなくなつたので、私も母の家に介護に通うようになり、それがきっかけで、二級ヘルパーの資格を取って仕事としての介護までするようになった

のですが、私が今の私に至るためには、大きな飛躍が必要でした。

一九四七年生まれの私の人生は、客観的に言えば、大学に入って遭遇した学園紛争の影響をどこまでも引きずった人生ということが言えるのかもしれない。闘いが敗北に終わり、この社会の中でどう生きていくのか全く分からなくなった私は、二十代のすべてを学生で過ごし、三十で中学校の教員になったものの、すぐに挫折し、その後は、音楽教室自営と称して、無職に近い生活を長く続けてきました。結果としての私の人生は、仕事からの逃避のようなものになりました。

そんな私が、母の介護をいやにならなかったこと、母の入所した特別養護老人ホームで話相手をした高齢者たちに気に入ってもらったことに勇氣を得、仕事としての介護までやろうとしたことは健気だったと言えると思うのですが、二級ヘル

パーの講習で、高度な専門職としての知識、技術、プロの厳しさのようなものを叩き込まれると、すっかり落ち込んでしまいました。もし、私が、仕事がそういうものの克服だということに違和感を覚えない人間であれば、私はもつと違う人生を歩んでいたことでしょう。私に働く決心がついたのは、ひとえに、私が、これからお話すヘルパーのWさんという方に出会ったおかげでした。

Wさんは、講習の最後に行われるヘルパー同行実習（ヘルパーに付いて利用者宅で実習する）の私の指導ヘルパーでした。実習当日、利用者（私よりも若い男性。仕事の内容は家事援助）の住むアパート付近で出会った、私よりも年上に見える女性がWさんだったのですが、こちらが初対面のあいさつをしても笑顔が返って来ないことに、まづ、びっくりしました。携帯電話ばかり掛けてい

て、利用者が時間までに病院から帰宅できなくなったとのことで、実習は一時間後、出直しになつてしまいました。最初から、不安の漂う実習でした。

一時間後、再び行くと、遠くから私を見つけたWさんは、私を待たずにアパートの利用者の扉の中へと消え、私が中に入ったときにはすでに台所仕事が始まつており、余念がないWさんは、私を利用者に紹介する気など、さらさらないようにでした。仕方なく、私は自分で自己紹介をし、上からせてもらい、Wさんのそばに控え指示を待ちました。Wさんは忙しそうに野菜を切ったり、鍋を火にかけてりするばかりで、いっこうに私に仕事を言いつけてくれません。このあとは、現場にひとり放り出されるだけなのに、この実習が見学で、どうして私にヘルパーをやる勇気が湧いてくるでしょう。意を決した私は、自分から申し出

て、皿を洗ったり、洗濯機を回したり、自分の仕事を作っていました。

ひとしきりして、仕事が一段落したらしいWさんが、利用者の前に座って話を聞いているのに気が付いた時に、おや、と思いました。一瞬、ふたりの姿が息子と母親に見えた程、ふたりの雰囲気自然で、何の変哲もなく、利用者のWさんへの信頼は深いらしいと分かり、私は軽いシヨックを受けました。これまでのWさんからは想像がつかせませんでした。

その後、ひとしきりして、私は、すしめしを作るWさんを手伝っていたのですが、近い距離で目



の当たりにするWさんの表情とか言葉の端から、Wさんという人のパーソナリティの核にある強い誠実を、ふと感じ、ハツとしました。

もしかして、Wさんが実習生の私の指導をろくにしてくれなかったのは、この強い誠実のなせるわざではなかったのか。立場上の必要に表面のつじつまだけを合わせることでできないWさんは、ただの主婦である自分に人を指導する資格はないと思つたら、本当に指導ができなくなるのではなにか。その不器用さこそWさんの神髄で、利用者はそのようなWさんを、私などの比ではなく、よく知っているのではないか。

私はWさんを理解したと思いました。このような人の下で働ける時間を至福の時間と思つた私は夢中で働きましたが、実習時間はあつという間に終わり、Wさんとは再び会うことのない関係に戻りました。帰宅後も、Wさんのことばかり考えま

した。

恐らく、私は、利用者から信頼されているヘルパーのWさんが、講習で教えられた「あるべきプロ」の姿から大きくはずれていたことに、救われたのでしょう。講習で打ちのめされていた私の心が、うそのように、希望を取り戻しました。

怖いといえは、とても怖い。でも、働いてみよう。利用者の前に裸のこの私を差し出し、あとは天に任せよう。

私は介護の仕事にたどり着くことができました。Wさんのような人が私にこの仕事の本質がどこにあるのかを教えてくれたのだ、と信じています。

(NPO法人ワークーズコレクティブ  
グループとも)